

アヴァンギャルド・アートを考える

京都大学が東京・品川の「京都大学東京オフィス」で開く連続講演会「東京で学ぶ 京大の知」のシリーズ14「美術研究最前線」。3月13日の第4回講演では、文学研究科の吉岡洋教授が「アヴァンギャルド・アートを考える」と題して、人々を時に絶句させる表現や行為を用いることもある前衛芸術（アヴァンギャルド・アート）について、哲学的なアプローチや事例を交えながら講演を行った。

●モダンから前衛に引き継がれた芸術概念

ard / avant-garde)



「芸術概念から自由になることは難しく、作者のどんな意図が隠されているかなど、固定化した枠組みで考えがちです」と吉岡教授

すが、美学は“こういうものが美しい”と答えを出すことではないのです」

実際には美学は特に芸術の美について考えることが多いが、これは近代社会においては絵画や音楽などの芸術作品の経験が美的な経験のモデルとされてきたからだ。現代の美学はそうした偏りへの反省から、狭い意味での「芸術作品」以外の文化現象や、自然や環境における美を研究する動向も拡大してきた。

美術シリーズ最終回の講師を務めるのは美学・芸術学を専門とする、文学研究科の吉岡洋教授だ。

「第3回までの講師の方々が専門とされている美術史というのは、広い意味で歴史学です」

歴史学は言語で書かれたものを資料とするが、美術史では言語だけでなく絵画、画像、造形物なども扱う。ただし、どちらも基本的には目の前に存在する何らかのモノ、事柄、記録などが研究の対象となる。

「それに対し、私が研究する美学・芸術学は全く違います」

特に、哲学の一分科である美学は、美的な経験の中心をなす「直感」、つまり直接感じるという人間の能力を中心に研究する学問。「誤解されがちで

美学が1つの学問として成立したのはここ200年の間のこと。比較的新しい学問であるが、中でも吉岡教授は20世紀の芸術現象を研究対象としている。ちなみに、吉岡教授は自らも美術展の企画や出版に関わり、またアーティストとしてメディアアートの制作などに携わっている。

「今日は20世紀の芸術現象の中でも、前衛について考えてみたいと思います」

前衛とはアヴァンギャルドというフランス語からきている語。文字どおり、「前のほうを衛（まもる）」という意味で、語源としては、戦争用語であった。その後、スポーツや政治思想、芸術にも使われるようになる。前衛芸術とは既成の芸術概念や形式を否定し、革新的な表現を目指す芸術を総称する。

前衛という言葉が意味を持つには、前と後ろ、あるいは前進・後退がなければならないが、芸術においても同様である。実は、芸術史上、モダンから前衛という流れがあるのだが、その際に引き継がれた3つの芸術概念のうちの1つが、「芸術には歴史的発展がある」というものだ。

伝統的な美術においてもさまざまな“派”があって、親方と弟子がいる工房があったが、そこでは新しい派は以前あった派を否定して生まれたもの、という考え方はしなかった。しかし、モダンや前衛芸術においては、何々主義といった“イズム”が次々に登場し、後のイズムは前のイズムを乗り越えた、というふうと考えられた。

芸術概念の2つめは「芸術には自律性がある」というもの。芸術は、自らの運動を律する規則を、芸術自らが生み出している、ということだ。

3つめは「芸術の終焉」。芸術は発展を続けるわけではなく、どこかで終わるという考えであり、これが前衛にとって最も重要な問題である。

●芸術終焉を語った哲学者たち

「3つめの芸術終焉については、さまざまな哲学者が論じています」

最も重要な哲学者はヘーゲルだ。「芸術は精神（Geist）の自己表出である」と主張したのだが、ヘーゲルの言うところの精神は「知的な働き」という意味ではなく、「世界全体を動かしている原理」を指す。この精神がさまざまな形で現れる、その現れのひとつが芸術である、ということだ。そして、現れ方は「象徴的→古典的→ロマン的」という三段階をたどる。

象徴的な段階は、エジプトや古代オリエントなどの神像を想像すればいい。神像として精神が現れてくるのであって、形は調和的でも美しいものでもない。

古典的段階のモデルはギリシア。ギリシアの神像は、人間の身体として現され、しかも理想化された美しいプロポーションをしている。精神にふさわしい形態が表出したもので、ここで芸術のピークを迎える。

その後また、精神と形態のバランスが崩れてしまうのが、ロマン的段階だ。古典的時代後のキリスト教的なヨーロッパ芸術を、ロマン的と位置づけている。

そして、精神と形態の離反が進行すると、最後に芸術は終わる。

「芸術の終焉とは、芸術家がいなくなる、作品がつくられなくなる、ということではありません。芸術という形式が、精神の自己表出というプロセスの最先端ではなくなる、ということです」

このほか、ハイデッガーは存在論の立場からの近代美学を徹底的に批判し、「芸術は真理（アレーティア）が開示される場」であると述べている。非常にラディカルな芸術論だ。

アドルノは『美の理論』という著書の冒頭で、次のように記している。「今日、芸術に関して自明であることはもはや何ひとつないということが自明になった。芸術の内部や芸術の社会全体との関係においてだけでなく、その生存権すら自明ではないのである」

彼は前衛芸術の中に、未来の新しい文化や芸術の形につながるという希望と、終末に近いという危機感の2つの相反する価値を見ていたのである。

●前衛芸術の誕生と発展

ここで、前衛芸術の例として吉岡教授が画像を見せたのは、前衛を代表するダダイズムの画家、マルセル・デュシャンの「噴水」だ。既製品にサインをして「これが芸術作品だ」としたもので、前衛芸術を語る際に必ず登場する。

ダダイズムの主張の核心は、アンチアートである。既成の概念を破壊し、インパクトを与えようとした。

「それでも興味深いのは、アンチアートだったはずのものが、その後ちゃんとアートの中に回収され、一ジャンルとして認められてしまったことです」

前衛芸術の始まりは世紀の変わり目の前後にさまざまな形で見られるが、特に、第一次世界大戦終結後に盛んとなる。「第一次世界大戦による都市の徹底的な破壊を目の当たりに

し、人々はヨーロッパ文化が終わったと感じたのでしょう」

そうして価値基準の変換が起こり、ダダイスムをはじめ未来主義やキュビスムなどの前衛芸術が次々と誕生していく。

また、20世紀初頭は通信技術や輸送が格段に向上し、前衛芸術は文化も言語も歴史も異なる場所にあつという間に移植され、すぐにまた形を変えていく。1920年代半ば以降、ダダイスムを継承し、芸術の革新を企てるシュールレアリスムが世界中に広がる。

これ以降の前衛芸術で1つのポイントとなるのが、1950年代の抽象絵画である。有名なのは、ニューヨークを中心に活躍したジャクソン・ポロックだ。絵具を振りまいたり、上から垂らすドリッピングという技法によって制作した。

「彼によって、言ってみれば絵画が行き着くところまで行ってしまいました。とにかく“描かない”わけですから」

ポロックの絵は、従来の抽象絵画にはあった構造も徹底的に失い、画面のどこを切り取っても中心がない。と同時に、そこには激しさや内的感情のほとぼしりが見られ、その意味で表現主義的であることから、“抽象表現主義”と呼ばれている。

●「芸術の終焉」以後はどうなるか？

「最後に“芸術の終焉”以後の芸術についてお話ししましょう」

絵画が行き着くところまで行ってしまった抽象表現主義が終わった後、どうなったか。

1960年代、ニューヨークで興ったのがポップアートである。代表的画家であるアンディ・ウォーホルは大衆文化のイメージを借用し、マリリン・モンローやキャンベルスープ缶などを題材にした作品を送り出し、かつ工房制作のように若い弟子たちに大量に制作させた。

「ここまでくると、何が芸術なのか分からなくなります」

それに対してアメリカの哲学者・ダントーが唱えたのが、「アートワールド」である。

「芸術とは何か」というのは、まさに本質を突く問い。ポロックの頃まではなんとか答えることができたものの、ポップアート以降、その問い自体が無効となってしまった。

「そこでダントーは矛先を変え、本質の問いではなく、芸術が芸術として成立し得る社会的条件とは何か、という問いへとすり替えたのです」

芸術家をはじめ美術商や鑑賞者、研究者や評論家がいる。そういう1つの社会の中で、

ある作品について、売り買いされ、価値評価が行われ、研究され、美術館で展示されて、社会的・教育的価値が認められたりする。そういう「アートワールド」が成立していれば、その作品はもう芸術作品である、というのである。

この考えは、1960年代以降の美術における現実を理解するのに、非常に有効であった。

「うまい理論だけれど、逃げのようにも感じます。我々は奇妙なものを前にしたら、なぜこれが芸術なのか、芸術とは何なのか、という問いがわき起こることは避けられません」

参加者からの「芸術家自ら、これは芸術かと問い詰める必要はあるか。それともアートワールドだと納得するのか」という質問に対して、吉岡教授は次のように答えて、講演を締めくくった。

「私は、納得すべきでないと考えています。単にまだ誰もやっていないことを見つけ出して作品化し、アートワールドに認めさせてよし、とするのであれば、芸術は先細ってしまいます。芸術家だけでなく、鑑賞者もこれは何かと問いかける。そうあってこそ、芸術に未来があると思います」



「前衛音楽に対する見解」、「前衛とは真逆の、古典に回帰して現代風アレンジするような動きについて」など、幅広い質問がなされた